

# 金剛寺蔵『龍王講式』の式文世界 —— 釈論注釈と祈雨儀礼をめぐる ——

## 論文要旨

本稿では天野山金剛寺蔵『龍王講式』を題材に、本講式がさまざまな領域の言説を複合的に取り入れながら形成されたことを論じる。『龍王講式』は、延慶三年（一二三〇）の「請雨」に際して金剛寺で書写された旨を記すことから、実際の祈雨儀礼と結びついたテキストだと考えられる。分析の結果、本講式には『釈摩訶衍論』と、その注釈書に基づく叙述が多く確認できた。これは中世金剛寺教学の柱に『釈論』があつたことも合致しており、本講式が鎌倉後期から南北朝期の『釈論』をめぐる注釈活動と連動しながら編まれたことが明らかにした。また東密の修法である「請雨經法」の思想や世界観、儀礼の手順や解釈を示した次第書の言辞も色濃く反映されている。『釈論』やその注釈書、請雨經法の所依となる經典や次第書、そして神泉苑における空海の祈雨伝承など、隣接領域を横断しながら作成された『龍王講式』には、中世真言宗寺院における学問や儀礼の有様が映し出されているのである。

**キーワード** 【『龍王講式』、金剛寺聖教、『釈摩訶衍論』、請雨經法、祈雨儀礼】

有賀夏紀

## はじめに

中世寺院で催された法会や修法などの仏教儀礼は、仏菩薩への供養や祈願を目的とする宗教行為であると同時に、豊かな言辞や物語を生み出す場ともなり得るものであつた。そのひとつである講式は、仏菩薩・經典・祖師・神祇などを讃歎する講会の式次第、あるいはそこで朗誦される式文のことをいう。講会の中心となる式文は、対句をほどこした優美な表白体で綴られており、經典や注疏をはじめとして、漢籍や要文集からの引用や説話叙述など、多分に文学的要素をはらんでいる。また声明や雅楽といった音楽や演劇的所作もない、儀礼と芸能との相関性をうかがわせるものでもあつた。

本稿は、天野山金剛寺が所蔵する『龍王講式』を取り上げて、中世の真言宗寺院をめぐる学問や信仰の形態と、それによって育まれ

た儀礼テキストの特質を検討するものである。金剛寺蔵『龍王講式』は、中世金剛寺の祈雨儀礼に際して作成・書写されたものであり、実際の儀礼と結び付いている。本稿では『龍王講式』の式文世界をつまびらかにするために、本文の典拠となる経文や詞章を抽出し、經典・注疏・事相書・説話伝承など諸領域の言説を組み合わせることで構成された式文の性格と、その背景にある鎌倉後期から南北朝期にわたる学僧たちの学問活動について考察したい。

## 一、『龍王講式』における典籍利用

大阪府河内長野市の真言宗御室派・天野山金剛寺は、平安末期に鳥羽院皇女の八条女院の祈願所として庇護を受けた古刹で、南北朝期には南朝方天皇の行宮となったことでも知られる。『龍王講式』は金剛寺が所蔵する「金剛寺聖教」に含まれるものであり、管見の限りほかに類例のない本文をもつ<sup>(1)</sup>。

本奥書に「写本云、嘉元三年<sup>(2)</sup>七月下旬於川州金剛寺草之云々私<sup>(3)</sup>□、当寺学頭阿闍梨忍実草也」とあって、嘉元三年（一三〇五）に金剛寺第九代学頭の聖俊房忍実（一二五〇～一三一九）が草したものと伝える。卷末の書写奥書には「延慶三年<sup>(4)</sup>戊辰六月廿三日、於金剛寺書写了」と見えており、延慶三年（一三二〇）に金剛寺で書写された由がうかがえるが、本資料自体は室町中期の写本と思しい<sup>(2)</sup>。奥書にはつづけて六月十八日から七月一日まで執りおこなわれた

「請雨」の儀礼のことが記され、本講式が祈雨儀礼をめぐる環境のなかで生成されたことが知られる<sup>(3)</sup>。

『龍王講式』は五段式の体裁をとり、第一段は「大慈三昧ノ徳」、第二段は「如意満願ノ徳」、第三段は「人間有縁ノ徳」、第四段は「甘雨普潤ノ徳」、第五段は「廻向発願ノ徳」を讀んでいる。講式の趣旨を述べる表白部分によれば、世が澆季（末法）に及んで人心は乱れ、仏法は効験を失い、龍天の擁護もなく、旱魃が起きて池川の流水は尽きてしまった、そこで龍神の慈悲に頼んで三農の難月を祈りたいという。つまり本講式は、龍王を本尊として降雨と五穀豊穡を祈念するものであり、そのため東密の祈雨法である「請雨経法」や、その所依經典である『大雲輪請雨経』などの世界観が反映されたものとなっている。

それに加え、中世金剛寺教学の中心だった『釈摩訶衍論』とその注釈書、東密諸流が著した密教修法の次第書、中世に流布した空海伝と空海の著作、そして南都の貞慶が作成した講式や、漢籍、類書など、多彩な領域の言説が広く取り入れられており、鎌倉末期の金剛寺における学問と、金剛寺聖教の形成過程の一端が看取できる興味深い内容を有している。

はじめに、本講式における典籍利用の一例として、「大慈三昧ノ徳」を讀歎する第一段に焦点を当てたい。第一段は、本文の大半が『正法念処経』『大雲輪請雨経』『仏母大孔雀明王経』などの龍や祈雨に関する経文の引用で構成されている。

まず「正法念經」によれば、深海には龍の宮殿があつて、龍王には法行・非法行の二種類の者がいる。難陀・跋難陀など法行の龍王は熱沙の苦しみ無く、三宝を信じて甘雨を降らせる。その一方で、非法行の龍王は常に熱苦にさらされていて、衆生が善法をおこなわないときには勢力を増し、五穀不成にして世間を壊すという。つづく「請雨經」の取意文では、釈尊が龍王宮に赴いたとき、輪蓋龍王がどうすれば龍の諸苦を除き、瞻部州に甘雨を降らせて衆生に快樂を授けることができるのかと尋ねたところ、釈尊は「大慈」を行ずる旨を説いたという。さらに「孔雀經」が典拠の本文では、慈悲心をおこして諸龍の名号を称念すれば諸毒を除くとされていて、以上のことから慈悲の心をもつて龍を供養すれば、たちまちに甘雨が降ると結んでいる。つまり、ここでは「大慈」の行によつて「三熱之苦患」という龍蛇特有の苦痛を滅除することで、龍がもたらす降雨を請い願うという儀礼の目的が、經典の引用という形で掲げられており、この大慈の行こそが諸龍の名号を唱え、念じることだと示されているのである。

ここで注意したいのが、『正法念經』とされている引用文である。『龍王講式』に見える引用文は、じつは『正法念經』それ自体よりも、『孔雀經音義』という孔雀經の注釈書に掲載された要約文に近い<sup>(4)</sup>。また『龍王講式』と『孔雀經音義』では、非法行龍王の名が「惱乱龍王・奮迅龍王・黒色龍王・多声龍王」と漢名であるのに対し、『正法念經』では「波羅摩梯龍王<sup>經音</sup>・毘謹林婆龍王<sup>經音</sup>・

迦羅龍王<sup>經音</sup>・睺樓睺樓龍王<sup>多聲</sup>」と梵名で記されるなど、『龍王講式』が『孔雀經音義』によつたと考えられる要素が散見されるのである。孔雀經は、「孔雀經法」という息災や祈雨の修法に用いられる經典であり、ここでその注釈が参照されたのも理解される。このように、本講式には經典の引用や要約が多く、中世の学僧が經典と注疏を用いて講式を作文していたことが知られるのである。

つぎに、先徳の麗句を借用している例をあげたい。たとえば『龍王講式』の第二段には、以下のような対句表現がならぶ。

釈提桓因ノ得<sup>タル</sup>於牙齒<sup>ヲ</sup>、立<sup>テ</sup>塔婆<sup>ヲ</sup>於三十三天之雲<sup>ニ</sup>  
難頭和龍ノ敬<sup>コト</sup>於仏髭<sup>ヲ</sup>、磨<sup>ク</sup>水精<sup>ヲ</sup>於八万余里之月<sup>ニ</sup>云々

これは釈迦滅後の舍利の分配に関する逸話をもとにした叙述で、解脱房貞慶(一一五五―一二一三)の『舍利講式』が典拠と考えられるものである。貞慶が著わしたこの詞章は、舎利の讃嘆にしばしば用いられる常套句だったようで、『龍王講式』のほかにも、金剛寺の講式類では『涅槃講式』や『秘密舍利式』(整理番号四三函九七番)などに同様の文言を見ることが出来る。当寺には貞慶の『弥勒講式』の写本も残されていて、『龍王講式』の第四段には『弥勒講式』とおなじ『心地観經』の偈文が引かれるなど、中世金剛寺の儀礼テキストに貞慶の講式が取り入れられ、生かされていた様相がうかがい知られる<sup>(5)</sup>。

このように、『龍王講式』は經典や注疏、先徳の美文など、さまざまな典籍から間接的・直接的引用をおこなうことで、本尊の龍王と龍宮世界を莊嚴し、祈雨のための儀礼空間を構築している。そこには中世の学侶たちによる知識と典籍の集積成果が凝縮されており、中世真言宗寺院をめぐる学問や知的交流のあり方が投影されていると考えられるのである。<sup>(6)</sup>

## 二、『釈摩訶衍論』の龍と宝珠

中世金剛寺における学問のありさまを明瞭に物語るのが、式文の第二段である。ここでは第二段の龍と如意宝珠をめぐる言辭が、『釈摩訶衍論』と、その注釈書の影響下に成り立つことを論じたい。第二段は「如意満願ノ徳」を讃歎するために、龍が護る如意宝珠と、宝珠を中心に広がる海底の龍宮世界について語っている。東密において「如意宝珠」は信仰の要ともなるものであり、各法流で如意宝珠をめぐる解釈や口伝、行法などが多彩に展開した。<sup>(7)</sup>『龍王講式』第二段では、宝珠について以下のように述べている。

第二讚如意満願ノ徳者、大海龍宮殿中ニ有如意宝蔵、建テ、千重ノ門ヲ、持護ス彼宝ニ、所謂「如意宝珠」有リ多数、或以金翅鳥王ノ心ヲ、名金主如意<sup>一</sup>、或以遮多梨鬼ノ心ヲ、号満主如意<sup>二</sup>、或在驪龍之頸ノ下ニ、或ハ在九重ノ淵ノ底ニ、

大海龍宮殿には如意宝蔵があり、千重の門を建てて彼の宝を持護しているという。「大海龍宮殿」は『釈摩訶衍論』（以下『釈論』）やその注釈書に見える呼称で、「千重ノ門」のくだりは『釈論』第一の「摩尼宝蔵雖レ備ニ無量万宝ニ而開ニ千重門ニ群龍所ニ了知<sup>(8)</sup>」という衆生救済のための仏法の出現（「教法出現」）を説明する譬喩をもとにした叙述だと考えられる。

それから如意宝珠は「多数」あつて、金翅鳥王の心を「金主如意」（傍線A）、遮多梨鬼の心を「満主如意」（傍線B）と呼ぶとしている。この二種の宝珠のことも、『釈論』第二に見出すことができる。

四名名為「如意珠蔵」。此中有レ二。云何為レ二。「一者金主如意。二者満主如意。（中略）如契經中作「如是説。仏告ニ金剛蔵菩薩ニ言。仏子譬如金翅鳥王命終。然後其心入レ海為ニ如意珠。能生ニ金沙ニ利中益龍王<sup>一</sup>。一心本法亦復如是。能生ニ真理ニ利ニ円満者<sup>二</sup>。故本性智契經中作「如是説。譬如遮多利鬼。為レ報レ恩故於ニ一万劫<sup>三</sup>。為ニ如意珠ニ利中益海生<sup>四</sup>。」

『釈論』では、如意珠に金主如意と満主如意があること、金翅鳥王の命が尽きた時に、その心が海に入つて如意珠になること、遮多利鬼もまた如意珠となつて海生を利益することが述べられている。

こうしたことから、『龍王講式』はここで『釈論』の譬喩叙述を用いて本文を形成していることが理解されよう。

『釈論』は、大乘仏教の中心思想を説いた『大乘起信論』の注釈書で、南インドの龍樹（一五〇～二五〇頃）の作と伝えられる。古来、著者の真偽については諸説あるが、日本では空海が重視したために真言宗で盛んに研究され、多くの注釈書が著わされるに至った。中世金剛寺でも『釈論』は教学の中心を担っており、第五代学頭の阿鑊（一一九一～一二五六）が『釈論抄出』を、『龍王講式』の作者とされる忍実が『釈摩訶衍論眼精抄』といった注釈書を著わしたほか、多数の『釈論』関係写本が伝存している。<sup>(10)</sup>

『釈論』に登場する宝珠の話題も、そうした注釈類で取り上げられた。たとえば、鎌倉後期に紀州根来寺で活躍した中性院頼瑜（一二二六～一三〇四）の『釈摩訶衍論開解鈔』（以下『開解鈔』）や、おなじく頼瑜が諸尊法を詳釈した『秘鈔問答』などに、二種の宝珠への言及を見ることができる。前掲『龍王講式』の本文も、以下の『秘鈔問答』第十三「駄都秘決」の（a）～（d）と内容が重なる。

又云。案道理意。（a）在三大海底龍宮宝藏無數玉。……（b）

此玉從三寶藏一通三海龍王肝頸下。藏与頸不断常住。……問。

（c）觀仏三昧經說三金翅鳥心。釈論所引經遮多利鬼變為三如意珠<sup>一云云</sup>如何。……（d）故釈論疏第一云。有教所說。金翅鳥

心後成三此珠。有教所說。遮多利鬼變為三此珠。<sup>(11)</sup>

（a）（b）は空海仮託の『御遺告』を典拠とする本文で、つづく（c）では『觀仏三昧經』と『釈論』を、（d）では釈論注釈の『釈摩訶衍論疏』を引きながら、金翅鳥と遮多利鬼が変じる宝珠のことを論じている。<sup>(12)</sup> 頼瑜著作と『龍王講式』との具体的な影響関係は不明ながらも、両者が宝珠や『釈論』をめぐる類似の所説を載録していることがわかるだろう。

さらに第四段にも、『釈論』に基づく龍の叙述が認められる。

第四讚甘雨普潤ノ徳ヲ者、龍王ノ舌頭<sup>サキニ</sup>有微細ノ穴、名曰氣糸ト、  
從此穴ノ中ニ出シテ密雲ヲ、遍覆ヒ三千世界ヲ、從其ノ頭頂ニ出シ澄  
水ヲ、從其ノ尾末ニ生スト標嵐<sup>(13)</sup>云々、

龍王は舌先の「氣糸」から密雲、頭頂から澄水、尾から標嵐を生み出して、甘雨を降らせるといふ。右の波線部は、『釈論』第二の「無始契經中」の喩えとして見える「大海中有三大龍王。名曰三出生風水。從其頭頂ニ出三澄水。從其尾末ニ出三生標嵐<sup>(13)</sup>」という本文によるものだが、ここで注目したいのが、傍線部の「氣糸」をめぐる所説が釈論注釈によるものであつて、『釈論』自体には見出せないという事実である。

唐代の注釈書で、空海も用いた可能性があるという聖法の『釈摩訶衍論記』には、つぎのように記されている。<sup>(14)</sup>



標多羅唱提此云「氣糸」。即是龍糸。所謂龍王舌中有「一氣糸」。甚極微細譬如「頭髮」。其量無差而能出生撰、納滿「十方中種種密雲」。斯論大意亦復如是故。<sup>(15)</sup>

右の文章が、『龍王講式』の気糸の記述とほぼ重なることがわかるだろう。金剛寺には『釈摩訶衍論記』の中世写本が残されており、そこには当該本文も確認することができる。本資料は、表紙右上に「金剛寺御影堂」と書かれているため、正和四年（一一三五）に『撰定事業灌頂具足支分』十巻を御影堂に寄進した忍実に関係する資料かとも推測されるが、つまびらかではない。<sup>(16)</sup>

そしてふたたび『龍王講式』と同時代の注釈類に目を転じれば、頼瑜の『開解鈔』にも「聖法記」（『釈摩訶衍論記』）を出典として、当該部分が引用されている。<sup>(17)</sup>『龍王講式』が『釈摩訶衍論記』を直接参照したか、『開解鈔』のような釈論注釈類によっているかは容易に判じかねるものの、いずれにせよ「氣糸」の記述は、本講式に釈論注釈の言説が用いられたことの証左であり、本稿の第一節で指摘した『正法念処經』の引用態度にも通じる。

なお『開解鈔』を著わした頼瑜は、『龍王講式』が草された嘉元三年（一一三五）の前年に没しているが、その著作は後年、金剛寺第十三代学頭の上乗房禅恵（一二八四～一三六四）によって精力的に書き写され、金剛寺教学を支える柱のひとつとなった。禅恵は

『大日經疏指心鈔』『大日經疏愚草』『釈論愚草』『開解鈔』など頼瑜教学の中心を担う注釈書や、『秘鈔』『薄双紙』『薄草子口決』といった事相書を金剛寺に伝えている。それら典籍の奥書からは、禅恵が根来寺を幾度も訪れていたこと、東大寺東南院で三宝院流を相承したことを読み取ることができる。<sup>(18)</sup>そのため鎌倉末期から南北朝期にかけて、禅恵によって金剛寺・根来寺・東大寺をつなぐ寺院間ネットワークが培われていたことが指摘されてきたが、『龍王講式』の例は、禅恵以前の金剛寺における学問的交流を解明するための手がかりともなる。<sup>(19)</sup>

直接的な典拠関係は慎重に検証すべき問題ではあるが、本講式が『釈論』をめぐる鎌倉後期の注釈活動と連関しながら形作られたことは確かであり、これは講式のテキストが注釈書や次第書といった隣接領域を横断して編まれたことを端的に示す好例といえる。そこには中世の『釈論』研究をめぐる東密教学の広がりや、真言密教寺院間の学問的交流の痕跡が残されているのである。

### 三、請雨經法と龍宮世界

釈論注釈とともに着目したいのが、請雨經法である。つぎに、龍と祈雨をめぐる修法世界が『龍王講式』に及ぼした影響について考察していきたい。

請雨經法は、『大雲輪請雨經』『大雲經祈雨壇法』『陀羅尼集經』

などを所依とする密教修法で、天長元年（八二四）に空海が神泉苑でおこなったという祈雨儀礼を濫觴として伝える<sup>(20)</sup>。平安期には神泉苑に飯屋をたてて修されており、飯屋には大壇・護摩壇・聖天壇・十二天壇の壇所が設けられた。大壇の中央には、請雨経をおさめた経箱と仏舍利を安置し、龍宮に在す釈尊・菩薩・龍王を描いた「懸曼荼羅」と、五龍王を描いた「敷曼荼羅」の二種類を用意する。飯屋南端の第一間には、空海の御影も懸けられたという。

守覚法親王（一一五〇～一二〇二）が東密小野流の諸尊法を集成した『秘鈔』の巻五「請雨経法」では、修法で用いられる宝珠と龍の関係が、つぎのように示されている。

釈迦即成<sup>二</sup>如意宝珠<sup>一</sup>。起<sup>二</sup>雲雨於四方<sup>一</sup>。普潤<sup>二</sup>世界<sup>一</sup>。利<sup>二</sup>益水陸之情非情<sup>一</sup>。龍王依<sup>二</sup>此宝珠<sup>一</sup>増<sup>二</sup>威光<sup>一</sup>。降<sup>レ</sup>雨。其宝珠依<sup>二</sup>大龍果報<sup>一</sup>施<sup>二</sup>力用<sup>一</sup>降<sup>云云</sup>。供<sup>二</sup>舍利<sup>一</sup>時。同作<sup>二</sup>此觀<sup>一</sup>。遣告意也。大壇中心舍利納<sup>レ</sup>箱安<sup>二</sup>置之<sup>一</sup>。<sup>(21)</sup>

大壇の中心に安置される舍利は、如意宝珠と同一視されるものであり、雨を降らせる龍王の力の源であると同時に、請雨経法で供される呪具であった<sup>(22)</sup>。『龍王講式』第二段によると、龍宮には三弁宝珠を安置する五柱の宝楼閣があり、東南西北の門をそれぞれ龍王が守護しているという。以下、第二段の本文を、便宜上（A）（B）（C）に分けて掲載する。

（A）凡大海龍宮殿中有<sup>レ</sup>五柱ノ宝楼閣、々々ノ内ニ有<sup>レ</sup>如意宝台、々ノ上ニ安<sup>ス</sup>三反宝珠<sup>并</sup>、東門ニハ難陀・跋難陀ノ二龍、南門ニハ娑迦羅・和修吉ノ二龍、西門ニハ徳叉迦・阿那婆達多ノ二龍、北門ニハ摩那斯・優鉢羅ノ二龍、持護ス之ヲ「是表八葉ノ九尊<sup>并</sup>也」  
（B）又東門ニハ三頭龍、南門ニハ五頭龍、西門ニハ七頭龍、北門ニハ九頭龍、（C）面々而出現舌威ヲ、各々守護ス之ヲ、于時<sup>二</sup>此玉被<sup>テ</sup>催龍神之威福<sup>二</sup>、雨七珍万宝ヲ、満足<sup>スト</sup>自他之衆願ヲ云々  
「是擬五智ノ如来<sup>ニ</sup>也」

ここで龍宮世界は、楼閣が担う縦方向への垂直的な広がり、東南西北の四方があらわす横方向への水平的な広がりをもつ世界として立体的に創出される。そしてその中心には、宝台に安置された三弁宝珠が存在するという<sup>(23)</sup>。この『龍王講式』（A）（C）の記述は、請雨経法の敷曼荼羅や、その典拠となる経典、そして『釈論』に關わっている。

まず（A）では、東南西北の門を、難陀・跋難陀をはじめとする八大龍王が二龍ずつ守護するという。『龍王講式』はこれを「八葉ノ九尊」と称しているの、八大龍王に守られる龍宮世界は、胎蔵界としてあらわされていることが理解される。八大龍王の登場は「八葉」に配するためだと考えられるが、本講式に『法華経』を典拠とする偈文や叙述が多いことも無関係ではなからう。八大龍王



は、『法華經』守護の龍王たちだからである。<sup>(24)</sup>

さらに (B) のように、東南西北にそれぞれ三頭・五頭・七頭・九頭の龍が配置される場面は、『陀羅尼集經』『大雲經祈雨壇法』などを所依とする、請雨經法の「敷曼荼羅」を想起させる (図参照)<sup>(25)</sup>。(A) (B) では東南西北の四方を「門」を使って示しているが、これも『陀羅尼集經』に見える表現である。<sup>(26)</sup>『秘鈔問答』では請雨經法の敷曼荼羅について、諸説を併記しながらつぎのように述べている (二重線部)。

問。曼荼羅図絵事何。答。作法如三次第記レ之。(中略) 金寶云。曼荼羅図相二種也。謂大曼荼羅敷曼荼羅也。龍王之中画二釈迦・觀自在・薩埵・輪蓋・難陀等二為二大画。五大龍王為敷一頭龍頭一尺。三頭龍三尺。五頭五尺。七頭龍七尺。九頭龍九尺。是五類龍王也云云。(中略) 集經十二云。其壇界畔作二重二而開「四門」壇之東門將以三泥土作二龍王身。……一身三首。……次於「南門」又以三泥土作二龍王。……一身五首。……次於「西門」又以三泥土作二龍王身。……一身一頭。……次於「北門」又以三泥土作二龍王身。……一身九首。……次壇中心又以三泥土作二龍身。……一身一頭。龍頭向東云(中略)私云。懸曼荼羅中尊釈迦。左金剛手。右觀音。前右龍王輪蓋。右辺二龍難陀・拔難陀院也。仏前僧形須菩提也。敷曼荼羅五方龍王五大龍王歟。<sup>(27)</sup>



ここで頼瑠は「金宝」などの事相書と「集経」といった經典の説を掲げたあとに、「私云」として敷曼荼羅に描かれる五方の五龍は「五大龍王」かと結んでいる。<sup>(28)</sup>なお『陀羅尼集経』では「壇中心」の龍にも触れているが、これは『龍王講式』において宝珠と重ねられていると推測されよう。

さらに『龍王講式』では、(C)の末尾で多頭龍たちを「五智ノ如来」と解釈していることから、この世界を金剛界と見なしていることがわかる。かくして八大龍王が護る(A)の胎藏界と、五龍王が護る(B)の金剛界が並立し、龍王のつどう大海の龍宮は、胎金兩部の曼荼羅として成立するのである。

このように『龍王講式』は請雨經法の言説を反映しているのだが、留意したいのが、それが即座に請雨經法の実修と結びつくわけではないということである。『龍王講式』が書写された延慶三年の請雨において、理趣經・尊勝陀羅尼の誦誦や管絃講といった祈雨のための儀礼が催されたことは奥書から看取できるものの、現時点で請雨經法自体が実施された記録を確認することはできない。祈雨儀礼には説経や修法など様々な方法があったが、請雨經法は元来、神泉苑でおこなわれる大がかりな「大法」であり、道具の調達も容易ではなかったという。<sup>(29)</sup>それゆえ講式の言説と、請雨經法の実修との関係性は慎重に考えていくべきであろう。

さて、(C)の本文では、再び『釈論』の表現が踏まえられてい

る。

為<sub>レ</sub>欲<sub>二</sub>顯<sub>一</sub>示雖<sub>レ</sub>眼耳中見聞宝雨之妙術。思心中解<sub>中</sub>知無尽之  
 円徳<sub>上</sub>。而出<sub>二</sub>現舌威<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>競入<sub>レ</sub>門開<sub>二</sub>通往向<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>近<sub>二</sub>隔檀<sub>一</sub>。得<sub>中</sub>  
 如意宝藏<sub>上</sub>無<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>證<sub>二</sub>台宮<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>口語中誦持教義之尊辭。思心  
 中觀<sub>中</sub>察<sub>上</sub>略之深理<sub>上</sub>。<sup>(30)</sup>

龍たちの様子を描写した(C)は、右の『釈論』傍線部の取意文である。(C)で用いられた「舌威」は、『釈論』や『開解鈔』に見られる語句であり、本講式が『釈論』とその注釈の影響下で成立したことが再認識される。講式の作者が『釈論』に通じていた事実は、中世金剛寺で『釈論』が教学の中心となっていたこと、また作者とされる忍実が『釈論』の注釈書を著わしていたことも矛盾しない。以上のように『龍王講式』では、東密諸流が尊崇する舍利如意宝珠を中心に、『釈論』と注釈に基づく龍王の叙述や、請雨經法と請雨經曼荼羅といった種々のイメージを重ねながら、対句的修辭によつて式文を綴り、祈雨のための聖なる儀礼空間を荘厳している。これは作者の広い学識とともに、『龍王講式』が文学的表現と密教教学、そして祈雨儀礼とをつなぐように存在していることを示すものといえよう。

#### 四、神泉苑の石座と「最極秘事」

請雨經法に関連して、もう一点指摘しておきたい。『龍王講式』の第四段では空海の祈雨伝承が語られるが、この叙述にも東密の口伝が取り入れられている。

東密の祈雨儀礼において、龍や宝珠とともに讃えられるべき重要な存在が、祖師の空海である。これは天長元年（八二四）に、空海が神泉苑で請雨經法を修し、その際に「善如龍王」が現われて雨を降らせたという故事に由来する。現在では、この祈雨伝承は史実ではないとされているが、『御遺告』『大師御行状集記』『今昔物語集』『弘法大師伝絵巻』など、多くの空海伝に認められる。『龍王講式』第四段には、つぎのようにある。

天長元年<sup>歲次甲辰</sup>、天下亢旱<sup>カウ</sup>シテ草木枯折<sup>セツス</sup>、大師依勅<sup>ニ修シ給シカハ</sup>請雨ノ法ヲ、修因以テ嫉妬心ヲ、呪<sup>シテ</sup>海中ノ龍<sup>ヲ</sup>、籠<sup>ニメテ</sup>水瓶<sup>ツメノウチニ</sup>内<sup>ニ</sup>、封シテ口ヲ不出<sup>一</sup>、大師遙<sup>ニ</sup>請シテ无熱惱池ノ善如龍王<sup>一</sup>、令<sup>ム</sup>来<sup>ラ</sup>日域平ノ京<sup>ニ</sup>、金色ノ八寸ノ小龍、乗<sup>シテ</sup>九尺ノ大蛇ノ頂<sup>ニ</sup>、而現<sup>ル</sup>神泉苑ノ池ノ内<sup>ニ</sup>、石座ノ之上<sup>ニ</sup>、于茲慈雲遍覆<sup>ヒ</sup>一天<sup>ニ</sup>、甘雨忽<sup>ニ</sup>激<sup>ミ</sup>、四海<sup>ニ</sup>、爾時帝皇獻<sup>シ</sup>幣帛<sup>ヲ</sup>、門葉備<sup>フ</sup>法味<sup>ヲ</sup>、真言遍法之嚴<sup>ニ</sup>始<sup>マル</sup>、從此<sup>ノ時</sup>、

天長元年の旱魃の際、勅が下された大師は「請雨ノ法」を修した。これに「修因」が嫉妬して海中の龍を水瓶に封じてしまったため、大師は無熱惱池より善如龍王を請じた。善如龍王は金色の八寸の小龍の姿で、九尺の大蛇の頭上に乗り、神泉苑の池の中の石座の上に示現した。するとたちまち雲が天を覆い、四海に甘雨がみなぎった。真言宗の繁栄は、このときより始まるという。

『龍王講式』の本文にもあるように、中世には神泉苑における空海の祈雨が真言宗隆盛の発端として認識されており、この伝承も単なる祈雨成功譚を超えた意味をもっていた。<sup>(31)</sup>修因（守敏、修敏とも）の妨害をうける物語の筋は『大師御行状集記』（一〇八九年成立）などと同様だが、善如龍王が神泉苑の「石座之上」に現れたとする描写は、ほかの空海伝には見られない。各伝では「從池中現形」（『御遺告』）とだけ表記されているのである。

この『龍王講式』の石座の記述にも、じつは請雨經法の秘説が投影されていると考えられる。たとえば、勧修寺流の諸尊法を集めた実運（一一〇五〜一一六〇）の『秘藏金宝鈔』、おなじく勧修寺流の口伝・折紙を集成した寛信（一一〇四〜一一五三）の『伝受集』、また保寿院流永嚴の伝授に基づく『沢鈔』、そして『秘鈔問答』といった東密諸流の事相書では、善如龍王が池の中の石に示現したと明言しているのである。

東門修<sup>ニ</sup>五龍供<sup>一</sup>。北井供物料。西北井阿伽料。池良方池底入有

石。件石龍現仍其石云云。〔『秘藏金寶鈔』<sup>(32)</sup>〕

又私造龍王之形其体如龍告用茅供養種種妙供放池中。即大師御時龍王出現也。池也。假當東門有。池也。石上。〔『沢鈔』<sup>(33)</sup>〕

問。龍供作法并在処如何。……私云。更有龍穴。最極秘事也。

口伝云。……朱付云。龍王出現所當三東門池中有石之處。遺告池中現。云云。〔『秘鈔問答』<sup>(34)</sup>〕

これらは請雨經法で龍を供養する「龍供」の作法からの抜粋だが、ここでは龍王が出現した場所を「良方池底」「東門池中」などの石上としている。『御遺告』をはじめ、空海伝で語られなかった池の石は、やがて『秘鈔問答』に記されるように、神泉苑と龍宮とをつなぐ「最極秘事」の「龍穴」と結び付いて展開していくのである。<sup>(35)</sup>

『龍王講式』の「石座」は、本講式の空海祈雨伝承が、中世の説話集や空海伝、絵巻、あるいは諸流の伝授の場合など、さまざまな媒体と場で語られた空海の伝説に、請雨經法の秘説が取り入れられて形成されたことを示している。それはまた『龍王講式』の作者が東密の秘説伝授の場合、そこで伝えられる口伝・折紙・切紙などに接する立場であつたことも物語つていよう。

ちなみに『龍王講式』には、空海『秘藏宝鑰』からの引用も多い。祖師の文章の引用は、祖師に対する信仰の表現にほかならず、またその宗教的な営みを追体験することにもつながる。それと同時に自宗繁栄の礎を築いたという点において、空海の祈雨は特別なもので

あり、その文章を散りばめることで、祈雨の成功を企図していると考えられるのである。

## おわりに

最後に、『龍王講式』の作者とされる金剛寺第九代学頭の忍実について、若干触れておきたい。本講式は嘉元三年（一三〇五）に、忍実によつて草されたと伝える。

忍実は西大寺叡尊の甥とされる人物で、先述のとおり『釈論』の注釈書である『釈摩訶衍論眼精抄』を著わしている。また金剛寺聖教の奥書に名が見える初めての学頭でもあり、『瑜伽師地論』や『胎藏界念誦次第』『駄都行法次第』等を書写したこと、安然の『撰定事業灌頂具足支分』を金剛寺御影堂に寄進したことが知られている。<sup>(36)</sup>

このほか、仁和寺蔵の金剛寺文書に含まれる正和三年（一一三二）四「学頭忍実金剛寺証文拾遺目錄写」<sup>(37)</sup>では対句表現を用いた文章が冒頭に掲げられており、おなじく金剛寺文書の文保元年（一一三七）「金剛寺学頭忍実置文案」<sup>(38)</sup>では『梵網經』とその注釈を引用して本文を成している。こうした現存資料からは、忍実が『釈論』をはじめとして唯識、密教修法、伝法灌頂、台密などの幅広い典籍に通じていたこと、対句的修辭を用いて文章を編むことに長けた人物だったことがうかがえるのである。

時代は下るが、享保十四年（一七二九）に編纂された『河州錦部郡天野山金剛寺古記写』には、忍実が金剛寺の塔尾で鉄塔を感得したこと、弘法大師「同前」という靈託があつたことなどが見えており、広範な知識を持つ忍実が金剛寺の伝説的人物として語り継がれていったことが推察される。<sup>39)</sup> 今後、忍実著作を検討することで、鎌倉後期の金剛寺をとりまく学問環境が、より明確になると考えられる。

以上、『龍王講式』を分析し、本講式がさまざまな領域の言説を複合的に取り入れながら成立したことを論じてきた。『釈論』に基づく叙述の多さは、中世の金剛寺教学の柱に『釈論』があつたことも符合している。また、その注釈類と重なる内容も散見されることから、本講式は鎌倉期から南北朝期の『釈論』をめぐる学問活動と連動して生まれたものと位置づけることができよう。

そして、請雨経法思想・言説・世界観も反映されている。それがそのまま請雨経法の実修を意味するわけではないものの、『龍王講式』は請雨経法の所依となる『大雲輪請雨経』『陀羅尼集経』などの文言を用いながら、空海祈雨伝承をめぐる秘事口伝を載録しつつ、龍王や如意宝珠を称揚する儀礼テキストを形成しているのである。

なお、『龍王講式』の本奥書と書写奥書の間には、「請雨経五十三仏名」と称して、『大雲輪請雨経』に見える五十三仏の名が書き連ねられている。仏名の後には、「若能受持称名礼敬者ハ、一切諸龍

所有ノ苦難、皆悉ク解脱ス」と『大雲輪請雨経』の一説が引かれており、実際に祈雨儀礼のなかで五十三仏の名が朗唱されたことが想像される。これは第一段で掲げられていた龍の諸苦を取り除くための称名〓慈悲の行を想起させるものでもあり、『龍王講式』と儀礼の実修とが結びついていたことをうかがわせる。<sup>40)</sup> このように中世金剛寺の祈雨儀礼のなかで生まれた『龍王講式』には、中世の真言宗寺院における学問や、儀礼のありさまが照射されているのである。

## 註

(1) 金剛寺には一万点におよぶ資料類が伝存しており、近年の研究成果の一部は、後藤昭雄監修『天野山金剛寺善本叢刊』第一期・第二期（勉誠出版、二〇一七・二〇一八）として刊行されている。本稿で引用する『龍王講式』本文は、第二期第三卷「儀礼・音楽」（中原香苗・米田真理子編）収載の影印と翻刻による。句読点等は適宜、私に付したところもある。

(2) 『天野山金剛寺善本叢刊』第二期第三卷の近本謙介氏による「金剛寺藏講式類」解題参照。

(3) 奥書には、このときの請雨で理趣経と尊勝陀羅尼の説誦や管絃講がおこなわれたこと、十三日間にわたる祈禱の結果、七月一日の夕方から「大洪水」のような雨が降ったことなどが記載されている。

金剛寺には『龍王講式』のほかにも、水分明神を称揚する『水分講式』（二二九一年写）や、『神泉園事』と題する説草断簡（室町時代中期写）などが存しており、祈雨や水神の信仰も想像される。近本謙介「金剛寺藏講式類」解題（前掲注2）参照。

(4) 『孔雀経音義』中巻（『大正蔵』六一、七九三頁c）。



- (5) 『涅槃講式』『弥勒講式』は、『天野山金剛寺善本叢刊』第二期第三卷（前掲注1）に収載。
- (6) 説話文学会の二〇一八年四月例会で「寺院における学問と唱導―天野山金剛寺聖教を基点として」と題し、箕浦尚美氏、仁木夏実氏、中川真弓氏による報告がおこなわれた。そこで『能生諸仏経釈』『明句肝要』『無名仏教摘句抄』などの具体的な経釈や要文集の検討から、唱導における漢詩句や要文利用が論じられた。講式を含むテキストにも、こうした資料が用いられた可能性が高いと考えられる。『説話文学研究』五四（説話文学会、二〇一九・九）、『天野山金剛寺善本叢刊』（前掲注1）参照。
- (7) 如意宝珠に関しては、阿部泰郎「宝珠と王権―中世王権と密教儀礼」（『岩波講座 東洋思想16 日本思想2』岩波書店、一九八九）、田中貴子『外法と愛法の中世』（砂子屋書房、一九九三）、上川通夫「如意宝珠法の成立」（同『日本中世仏教史料論』吉川弘文館、二〇〇八）、伊藤聡『中世天照大神信仰の研究』（法蔵館、二〇一一）、藤巻和宏『聖なる珠の物語―空海・聖地・如意宝珠』（平凡社、二〇一七）ほか、多数の論考がある。金剛寺には舍利施入の記録が残り、いまでも多くの舍利講式が伝えられる。建暦元年（一一二一）の「金剛寺住僧等謹請条々起請事」からは、鎌倉初期に金剛寺で二・五・八・十一月の十五日に「四季舍利講」が修されていたことがうかがえる（『大日本古文書』家わけ第七、五五八〜五六〇頁）。金剛寺の舍利関係資料は、赤塚祐道「中世における舍利信仰の一考察―『秘密舍利式』と『道場観 大師法眼観』をめぐって」（『密教学研究』四二、二〇一〇・三）で言及されている。
- (8) 『釈摩訶衍論』第一（『大正蔵』三二、五九七頁b）。
- (9) 『釈摩訶衍論』第二（『大正蔵』三三、六〇三頁b・c）。
- (10) 赤塚祐道「学頭の書写活動から見た金剛寺教学の変遷」（『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究―金剛寺本を中心に』科学研究費基礎研究（B）19230037 研究成果報告書、二〇〇九・三）参照。
- (11) 『秘鈔問答』第十三（『大正蔵』七九、五一三頁b・c）。
- (12) (d) は「開解鈔」にも見える本文である（『日本大蔵経』四四、一四七頁）。
- (13) 『釈摩訶衍論』第二（『大正蔵』三二、六〇三頁b）。忍実の『釈摩訶衍論眼精抄』にも龍王に関する言及があり、そこで「標風」や「遮多梨鬼」が取り上げられている。ほかにも近い時代のものでは、東寺学頭の頼宝（一二七九〜一三三〇）の『釈摩訶衍論勘注』に類似の記事が確認される（『大正蔵』六九、六四四頁b・c）。
- (14) 『仏書解説大辞典』『釈摩訶衍論記』項目（大東出版社、一九八八）参照。
- (15) 『釈摩訶衍論記』（新纂『大日本統蔵経』四五、七八一頁b・c）。
- (16) 本書は外題に「聖法記」、内題に「摩訶衍論記」巻」とあって、巻末には建長五年（一二五三）の賢念による加點奥書が残されている（整理番号二八函九番）。後藤昭雄編『金剛寺経蔵聖教目録』第2分冊（科学研究費基礎研究（B）23230052 研究成果報告書、二〇一五・三）参照。なお、目録には本書の外題が「聖宝記」と記入されているが、正しくは「聖法記」。
- (17) 『釈摩訶衍論開解鈔』巻一（『日本大蔵経』四四、一〇八頁）。前掲注13の頼宝『釈摩訶衍論勘注』にも気糸の記述が見出せる（『大正蔵』六九、六二八頁a）。『龍王講式』で気糸は舌頭の穴とされているため、龍糸とする『釈摩訶衍論記』とは若干異なるものの、『龍王講式』の当該本文の裏書には「龍王舌中有一ノ気糸、甚深微細、猶如頭髮」とあって、こちらはより『釈摩訶衍論記』の本文に近い。裏書がいつの段階で加えられたかは検討を要するが、これ

も本書を出典とする文言であらう。

- (18) 赤塚祐道「根来寺中性院頼瑜と天野山金剛寺禅恵をつなぐもの——事教二相の流伝」(『根来寺文化研究所紀要』一、二〇〇四・一二)、同「金剛寺聖教——上乘房禅恵の書写活動」(『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』科学研究費基礎研究(A)15202002研究成果報告書、二〇〇七・三)参照。
- (19) 小林直樹氏は前掲注6の報告をうけ、シンポジウムで紹介された十二、三世紀の金剛寺聖教には、律書や禅籍、天台系典籍、南宋の新しい典籍など幅広い教学が背景にあり、「一四世紀の禅恵の時代に焦点が当てられることが多かった金剛寺にあつて、それ以前の時代における同寺の僧の学問や他寺の僧とのネットワークの存在をうかがわせる」と指摘している。小林直樹「バネリストの報告を承けて——資料典拠の問題を中心に」(『説話文学研究』五四、説話文学会、二〇一九・九)。
- (20) 東密の祈雨儀礼は、ステイブン・トレンソン『祈雨・宝珠・龍——中世真言密教の深層』(京都大学学術出版会、二〇一六)、戴元晶『雨乞儀礼の成立と展開』(岩田書院、二〇〇二)など参照。
- (21) 『秘鈔』巻五(『大正蔵』七八、五〇六頁b)。
- (22) 『秘鈔問答』でも、請雨経法の壇の中央に舍利を置くのは龍王が深く仏舍利に帰敬しているからで、舍利には「甘露普潤之徳」があると説いている(『大正蔵』七九、三九〇頁a)。舍利と祈雨をめぐるのは、ほかに『日本後紀』逸文の天長四年(八二七)五月に、空海が内裏で仏舍利を用いた祈雨をおこない、その後の降雨を「舍利靈験」と評した記事などがある(『国史大系』五「日本記略」四五六頁)。
- (23) 『秘鈔』によると、請雨経法の道場観(本尊の道場を建立するための観想)では、宮殿楼阁や蓮花座、種子、釈迦如来、観音・金剛手菩薩、輪蓋・難陀・跋難陀龍王、そしてそれを圍繞する諸菩薩や眷属たちをイメージするという(『大正蔵』七八、五〇六頁a)。この道場観は「懸曼荼羅」の図柄と重なり、『龍王講式』の龍宮世界とも通底している。
- (24) 『伝受集』や『秘蔵金寶鈔』によると、請雨経法で立てる八本の青色の幡には、八大龍王の名を梵字で書くという。『秘鈔問答』にも、祈雨の際には輪蓋龍王や五大龍王とともに八大龍王へ祈請する由が見える。また仁和寺に残る「神泉御説経導師次第(開白)」(『守覚法親王の儀礼世界』勉強出版、一九九五)では、神泉苑でおこなわれる孔雀経御説経の表白に八大龍王の名があげられるなど、八大龍王も祈雨と結びついている。
- (25) 掲載の図は、醍醐寺蔵『四家鈔図像』より「請雨経曼荼羅」(『大正蔵図像』三、八四九頁)。
- (26) 『陀羅尼集経』十一「祈雨法壇」(『大正蔵』一八、八八〇頁b・c)。
- (27) 『秘鈔問答』第六(『大正蔵』七九、三九三頁a・b)。
- (28) 敷曼荼羅には九体の龍が見えるが、トレンソン氏によると、これは本来、懸曼荼羅に描かれるはずの四龍が、五龍(中央と東南西北)の間に配されたものという。『祈雨・宝珠・龍』第二章第一章(前掲注20)参照。
- (29) 『祈雨・宝珠・龍』第一部第六章(前掲注20)参照。
- (30) 『釈摩訶衍論』第一(『大正蔵』三三、五九七頁b)。
- (31) 『祈雨・宝珠・龍』第一部第二章(前掲注20)参照。また、聖賢『祈雨日記』や勝賢『雨言雜秘記』には、成尊へ請雨経法の勤修を要請する際に「爰真言最上乘之中。有祈雨秘法也。祖師修之留利生於後代。(中略)於神泉苑可被勤修祈雨法者。綸旨如此。全莫辞退可悉之」(『続群書類従』二五下、二三一頁)と、請雨経法は祖師空

海の修法であり、辞退することがないよう伝える記事が見える。

- (32) 『秘蔵金寶鈔』六(『大正藏』七八、三六二頁a)。
- (33) 『沢鈔』第三(『大正藏』七八、四三二頁a)。
- (34) 『秘鈔問答』第六(『大正藏』七九、三九六頁b)。
- (35) 龍穴をめぐる秘説は、藤巻和宏「初瀬の龍穴と〈如意宝珠〉——長谷寺縁起の展開・「ふ一山」をめぐる言説群との交差」(『国文学研究』一三〇・二〇〇〇・三)参照。
- (36) 赤塚裕道「学頭の書写活動から見た金剛寺教学の変遷」(前掲注10)参照。
- (37) 「金剛寺文書 拾遺」(『大日本古文書』家わけ第七、五七七・五七八頁)。
- (38) 「金剛寺文書」(『大日本古文書』家わけ第七、一八二―一八四頁)。
- (39) 『河州錦部郡天野山金剛寺古記写』(『続々群書類従』三、五八五頁)。
- (40) 金剛寺には、近世の模写と思しき戦国期の境内図が残されており、そこには中央伽藍のそばに、三棟の小社と、鳥居の立つ池が描かれている。延宝七年(一六七九)刊の『河内鑑名所記』によれば、三社は天照太神、弁才天、善女龍王という。いまでもおなじ場所に元禄十三年(一七五〇)造営の小社が存し、天照太神、弁才天、八大龍王・善女龍王を祀る。池の名は『河内鑑名所記』に見えないが、現在では「龍王池」と称している。池や社がいつ頃から存在していたかは未詳だが、あるいは祈雨儀礼ともなんらかの関係があった可能性もある。

〔付記〕本稿は、科学研究費基礎研究(B)「金剛寺聖教・文書類を基盤とした社寺ネットワークの解明とその蔵書史的研究」15H03186(研究代表者・海野圭介)の助成を受けたものである。また本稿を執筆するに

あたり、近本謙介氏に多くのご教示を賜った。深く御礼申し上げます。

## ENGLISH SUMMARY

**The study of *Ryūō-kōshiki* at Kongō-ji Temple: Considerations into the influence of *Syakumakamon* and its commentaries and the rituals to pray for rain**

ARIGA Natsuki

This paper is a study of the aspects of academics and beliefs at Shingon Buddhist temples in the Middle Ages and the characteristics of the related ritual texts, through investigation of *Ryūō-kōshiki*(龍王講式)in Kongō-ji(金剛寺)Temple.

*Ryūō-kōshiki* is a text created for rain prayer ceremonies. As a result of investigating the authority relationship of *Ryūō-kōshiki*, many narratives of *Syakumakamon*(釈摩訶衍論)and its annotations were found in it. This indicates that this lecture was written in conjunction with the *Syakumakamon* annotation movements.

Furthermore, it became clear that the philosophy of the Shōgyōhō(請雨經法), which is one of the methods of esoteric Buddhism, and the legend of Kukai's(空海)rain prayer are closely linked across their territories, greatly affecting the formation of the ceremony. *Ryūō-kōshiki* expresses aspects of study and faith in the medieval Kongō-ji Temple.

**Key Words:** *Ryūō-kōshiki*, Kongō-ji-syōgyō, *Syakumakamon*, Shōgyōhō, rain prayer ritual

